

第十二回 筑前岩屋城

ちくぜんいわやじょう

～勇将高橋紹雲の意地、島津の野望を断つ～

たかはしじょううん

今回紹介するのは、福岡県太宰府市にある岩屋城という小さな山城です。ほとんど遺構も残っていませんし、余程の戦国ファンでもなければまず知らない城だと思います。しかしここは九州戦国史のハイライトとでも言うべき壮絶な攻防戦が繰り広げられた場所であり、冷徹な状況判断のもとで意地を貫いて散った高橋紹雲の決断はまさに歴史を変えたと言えるでしょう。

戦国時代後期の九州の状況

小領主が割拠していた九州も、次第に豊後(大分)の大友、肥前(佐賀・長崎)の龍造寺、薩摩(鹿児島)の島津が台頭し、それぞれの間で緊張が高まっています。その均衡を破ったのは島津でした。まず日向(宮崎)で大友を大敗させ、次に島原半島で龍造寺家当主の隆信を討ち取り、もはや九州に敵なしの状態となります。ですがこの時、既に中央では羽柴秀吉が織田信長の後継者の地位を手にするに至っていました。風前の灯火であった大友氏はプライドを捨てて秀吉に助けを求めますが、秀吉は小牧・長久手の戦いの後、徳川家康を容易に臣従させることができず、すぐには九州に兵を送ることはできませんでした。この状況をみてとった島津は、中央の混乱が収まる前に九州全土を制圧すべく、二方面から北上を開始したのです。

立花道雪と高橋紹雲

たちばなどうせつ たかはしじょううん

話は少し前に戻りますが、自らキリシタンとなり西洋文化に傾倒するなど少々戦国大名としての資質に欠けるところのあった大友宗麟を最後まで支え続けた武

将に、立花道雪という人物がいました。軍略に優れた武将で、足が悪く輿に乗って戦場に出ながらも前線に乗り込んで采配を振るってはたちまち敵を押し返したといえます。また、時に宗麟を諫め、そのために疎まれた時期もあるようですが、最後には宗麟自身が「大友家中で信頼できるのは立花道雪と高橋紹雲だけ」と秀吉に語っているように、真の忠義を貫いた武将でした。最終的には筑前博多を抑える立花城主となりましたが、娘しかなかったため、筑前岩屋城主で信頼に足る人物であった高橋紹雲に請い、彼の息子統虎を婿に迎えて立花家を継がせました。この二人が守るからには筑後(福岡県南部)の守りは揺らがなくなると言われていたといいますが、島津の北上作戦が進行する中、73歳であった道雪は陣中で没してしまいました。



島津軍の侵攻経路

岩屋城の攻防戦

九州の諸勢を次々に傘下に加えながら圧倒的な兵力で北上を続ける島津勢。ついに筑後を制圧して筑前へ侵攻します。筑後から筑前博多へ向かう街道は大宰府付近で両側から山が迫って狭くなっており、岩屋城はここを抑える重要な位置にありました。斜陽の大夫家を最後まで守ると思い定めた高橋紹雲でしたが、岩屋城は小城で守備兵もわずかに7百余り。そこで息子の統虎は、立花城まで引いて共に戦うか、せめて要害の宝満山城へ移るようにと勧めます。これに対し紹雲は、「宝満山城は確かに要害だが、地の利を得ても他勢と合流することで人の和を損なってはならない。また、わずかばかりの兵を率いて立花城に合流しても、父子同時に討ち死にする危険性がある。しかし、ここで敵を引きつけて戦えば、我々は全て討ち死にするかも知れないが、島津勢に少なからず損害を与え、侵攻を遅らせることができる。その上、要害の立花城で更にお前が持ちこたえれば、その間に上方より援軍も訪れるだろう。」という旨の返事を返したといえます。

そうしてついに5万にふくれ上がった島津勢が来襲。四方から一斉に攻撃が開始されました。しかし、城兵には鉄砲の上手が多く、更に上から大木・大石を落として防戦するので、島津勢の損害は目を覆うばかりで、10日余り経っても攻め落とすことができませんでした。それでもさすがに城兵には疲労の色が濃くなり、ついに外郭が破られ、島津勢が本丸へと押し寄せました。もはやこれまでと悟った紹雲は本丸の櫓に登って腹を切り、残った者も後を追って岩屋城は落城したのでした。

763名の城兵は全て討ち死に。しかし島津勢の死傷者はなんと4千5百。あまりの損害にすぐには立花城攻めにかかることができず、また、弱冠19歳の城主立花統虎は再三の降伏勧告にも頑として応じません。そうしているうちに、島津の陣に急報がもたらされました。「豊臣秀吉軍先鋒豊前に上陸!!」そもそも島津の戦略としては、秀吉軍がいかにも大軍であろうとも船で上陸する水際で迎え撃てば撃退できるとの考えでした。思わぬ足止めを食ったために当初の戦略が崩れた

大宰府政庁跡から岩屋城址を望む



本丸跡にある「嗚呼壯烈岩屋城址」の碑



島津勢は、筑前方面から退却して行ったのでした。

立花宗茂 (統虎)

これまでじっと城に籠っていた統虎ですが、島津勢が退却すると見るや猛然と反撃に出ます。またたく間に岩屋城や宝満山城を奪い返し、筑前を回復しました。秀吉も宗麟から統虎のことを聞いてはいたものの、これほどの者とは思っていなかったと思われます。その忠義と勇猛さを絶賛し、九州仕置きにおいて筑後柳河(柳川) 13万石を与えました。

その後も統虎改め宗茂は肥後国衆一揆や朝鮮出兵において数々の武功を立てるなど、自身が指揮する戦いで生涯一度も後れをとることは無かったといえます。しかし、関ヶ原の戦いでは義によって西軍に味方したため、領地を没収されてしまいました。それでも、その人柄を惜しむ人が多く、後に二代將軍徳川秀忠に口説かれて召抱えられ、最終的には旧領柳川に復帰しました。徳川幕府による大名取り潰しの嵐の中で、これは異例中の異例のことでした。現在の水郷柳川観光の中心「御花」は立花家の別邸だったところで、資料館には宗茂所用と伝わる甲冑等が展示されています。

現在の岩屋城址

本丸跡には「嗚呼壯烈岩屋城址」という印象的な石碑が立ち、二の丸跡には高橋紹雲以下勇士達の墓がひっそりと並んでいます。ハイキング登山コースの途中にあるので気軽に行ける所ではありませんが、大宰府には太宰府天満宮や太宰府政庁跡といった観光地がありますし、近年オープンした九州国立博物館も人気です。福岡に行く機会があったら、是非大宰府にも足を伸ばし、そして背後の岩屋城址にも目を向けてみて下さい。